

の一方面としての言語文學の研究は、日本文學研究史上に重要な意義を有して居ることを否定することは出来ない。

附記 國學に關する參考文獻は多い。二三の著をあげておく。國學史概論 芳賀矢一、國學史 藤岡作太郎、國學の研究 河野省三、國學の史的研究 伊東多三郎、近世史の發展と國學者の運動 竹岡勝也、契沖傳 久松潜一、本居宣長 村岡典嗣、日本思想史の研究 村岡典嗣、國學その成立と國文學との關係 久松潜一、國學の批判 西郷信綱。

文獻學

池田龜鑑

一 日本文獻學の成立

「時」はたえず古典の形態を破壊し、内容を不明瞭にして行く。この喪われて行く、原始的、性格を再建しようとするものが文獻學である。

日本の文獻學は遠く奈良時代以前の朝廷及び寺院に附屬した寫經事業にその萌芽を見、鎌倉初期の藤原定家、源光行・親行父子の源氏物語研究を初め、三條西實隆、細川幽齋などの學者を生み、又、江戸時代には國學という形で契沖・宣長・濱臣等の業績が示されてはいるが、文獻學的方法の自覺の上に立ち、批判と解釋との學として、體系を整えるに至ったのは明治以後の事である。

日本文獻學という名稱はわが國、本來の學問の名稱ではなく、上田萬年博士、芳賀矢一博士が、主としてドイツ文獻學—Philologieの譯語として用いられ、以後、一般に親しまれるに至ったものである。この譯語に際して用いられた「文獻」と言う言葉は論語に見え、朱子

の註によれば「文典籍也。獻賢也」としているから、本来の意味は古代を知る爲の書籍や古老の言などをまで包括する廣い意味であった。今日「文獻」と呼ぶ場合には、その本来の意味として含まれていたと思われる口碑傳承の類を民俗學の研究對象に讓つて、文書の類のみを意味するわけである。

さて一方この「文獻學」なる譯語を與えられない以前のフィロロギーの性格はどのようなものであったか。芳賀博士の講ぜられた日本文獻學の性格はアウグスト・ベック August Bockh の體系によるものと言われている。然し西歐の文獻學の歴史を眺めるとその性格には幾つかの變遷が見られる。その第一は最も初期の文獻學で、古代の言語的事實を究明する事を以て目的とし、ギリシヤ人によってその基礎が作られた。即ち廣義の言語學的・文法的・辭書的性格は、文獻學の最初から持っていた性格であると言える。

次に第二は十八・九世紀のドイツ文獻學であり、扱う對象はギリシヤ・ローマの全文化領域にわたつて、それが本来いかにあつたかと言う歴史家態度を以て臨んだ。然し、この古代學的文獻學にも、對象を文獻にのみ限り、「認識せられざるものゝ認識」を任務とする哲學に對して、「人間の精神的所産——認識せられたものゝ認識」が文獻學の使命であるとして、總體的ギリシヤ古代の完全な輪郭を描き上げようとする立場がある。アウグスト・ヴォルフ Friedrich August Wolf その高弟ベックの立場がこれである。まさしく歴史的・古代學的

文獻學と呼ばれるべき性格を持ったこの學風は、上田・芳賀兩博士によって我が國に取り入れられて以來というもの、「文獻學」の代表的性格と見なされるに至っている。

然し第三に、この歴史科學的・古代學的文獻學に對立するものとして、人道主義的文獻學とも言うべきものがある。即ち、古代をわれわれの知識欲の對象として、それがいかにあつたかと言う事を追求するにとどまらず、それが同時に人格の深化、文化の高貴化のために活用されねばならぬとする考え方である。これは既に文藝復興期の文獻學においてはもとより、やや下ってゲーテ、シラーなどの時代において展開した影響を見ればただちに肯けることである。そこでは従つて、文獻の中でも文藝的文獻が最も重視され、文藝に對する確實な言語的・文法的知識にもとづく解釋によつて、古代文化の中核をなして高く聳立する天才の人間像を浮びあがらせようとする。これが文獻學者本來の任務であると考へるのである。このやうな形でなされる古代思慕、浪漫的な探求意欲、独自の價值判斷は、ある意味でわが國の近世國學の性格にも指摘出来る所である。ベックなどの歴史主義的立場に對立しながら、近代の文獻學の大きな別流をなすこの立場が、文法的批判的學派の主領たるゴットフリート・ヘルマン Gottfried Hermann などによつて代表されている事は興味あることといわねばならぬ。

二 文獻學と隣接諸領域

芳賀博士の講ぜられた日本文獻學には、前述のようにベックなどのドイツ文獻學に類似する點があると同時に、古典的文獻の中で特に藝術的文獻を重要な素材とする點で、ヘルマンなどの考え方と同じ傾向が指摘出来る。

實はこの日本文獻學の内部にある二つの性格は、嚴密にはたがいに對立し抗争するものであつて、そのいずれか一方を強調する事によつて、文獻學の目的・方法・對象などは一見して全く異なる相貌を呈するに至るのである。

第一には文獻學内部に於ける事實的なものと原理的なものとを求める二性格である。偶然的な個々の事實の羅列、全體と何等關聯をもたない書誌的解説などは、あるいは學問以前のものであるかもしれない。然し又、事實を無視した方法的抽象性は、その空虚さのために科學的とは言えないであろう。この文獻學自身に内包されるたがいに訣別しえない二性格の、相互依存のかたちから、文藝學・民俗學・歴史學など、近接諸科學との交渉の道がひらけて來るわけである。

第二に古代人の殘した遺産の中で最も重要な遺産としての文學作品は、天才としての「個」である。しかもその「個」は一つの社會的・歴史的環境の諸關聯のもとにおいてはじめて可

能な存在である。「個」はその中に全體性を表出するとしても、なおその「個」を位置づける全體的なものを認めざるを得ない。ここにも近接諸科學と交渉する可能性が存在するわけである。更にこれと關聯して文獻學は古代の靜止した斷面を見るのか、その轉變する運動においてこれをとらえようとするのか、ということも考慮されなければなるまい。文獻學的考察と歴史學的考察との間に區別を置かなかつたベックの見解は是認されてよいが、ここに導き入れられる價値判斷については、歴史學との間に一線を劃すべきものようである。

次に注意される事は文獻學自體に内在する科學的なものと藝術的なものとの對立である。文獻學は科學である以上、客觀的・實驗的精神によって貫かれていなければならない。然し對象の選擇をはじめ、古典的寫本の處理の場合にまで、藝術的靈感に導かれざるを得ぬことは實際に文獻學的研究に従事する者の等しく承認する所である。特に天才の祕密をさぐることは、歴史的・科學的方法で行きつまつた所を、藝術的直觀によって架橋せざるを得ないであろう。しかしながら文獻學にとつては宿命的とも言える恣意的志向がしばしば科學的精神を蔽わしめ、他の壓力に屈從せしめる隙を與え、非科學的な方面に誘導される如き例はわれわれの記憶に新しい所である。同時に詩に對する關心をまったく持たない學究には人麻呂の本質は理解されないのである。淨土教的人間觀に何らの關心を持たない考證家には源氏物語三部の組織は理解し難いであろう。このような文獻學内部に對立する諸要素をいかに調和

するかの端緒は、生きた「人」としての、研究者の人間構造に見出されるべきものであろう。

三 文獻學の對象

さて、日本文獻學は先に述べたようにベックによって代表される歴史學的文献學の性格を受けついで所から、今日、わが國において普通「文献學」の名で呼ばれる内容には、多岐にわたる素材的部門が雜居しているようである。文献學を「國學」の別名と見たり、いわゆる「國文學」の異名と見たり、或は「書誌學」、「解題」、「訓詁註釋」、又、「本文批評」、「歴史的考證」と同一視するが如きである。いわばよい意味では綜合性・包容性、悪い意味での無個性・雜學性といった言葉であらわされる點のある事は否定し難い。ベックの言う古典的古代の「總體的文化」を明かにしようとする文献學の素材的組織の中には、獨立した、または當然獨立すべき多くの諸科學が雜居しているに過ぎないのであって、たとえ文献學が人間の精神の所産を縦軸において觀察するのではなく、横軸において觀察するのであると解答しても、そこには「歴史」の意味が喪失して、ベックの歴史的文獻學の體系が崩壊するのみならず、決して「文献學」という屋根を必要とはしないのである。又、ヘルマン・パウエル Hermann Paul のように文献學を文化科學と命名して見ても、所詮、總體像というものは蜃氣樓に似た存在に過ぎない。

この點、橋本進吉博士が「文獻を資料として各種の研究に用ひる爲には、先づ第一に文獻自身の性質を明らかにして、之を如何にして取扱ふべきかを考へなければならぬ」という立場から「かやうな文獻自身の性質を明かにし、その取扱方法を考へる學問を文獻學と名づけるのがよいと思ふ」と規定された事は、文獻學の概念を純粹に把握する上に極めて重要な考え方である。換言すればこれは文獻學を言語學に接近せしめた事にもなるが、かやうな言語・文獻は、すべて人間精神の所産である以上、必ず「意味」をもつものであつて、さういふ「言葉」の研究が文獻學の本質的なものをなすという事が出来るであらう。

與えられた言語・文獻における**原本的性格**の確認と文獻一般に通ずる諸法則の探求が文獻學の使命であると考へたい。ここに言う「**原本的性格**」とは決して單なる書籍の原始形態——例えば作者の自筆本というやうな形式的方面だけを意味してゐるのではない。むしろその言語ないし文獻を成り立たせている主體においては、何が認識されていたのかという事を復原的に追求することである。その文獻本文ははたして作者が自作として責任をおい得るものであるか、作者のいわんとした眞意はどのようなことであつたのか、作者をしてその作品を成立せしめた要因およびその過程はどのようなものであつたかなどの根本問題に解答を與えようとするものである。例えば同じく隨筆と呼ばれる枕草子と徒然草とを、今日流布する形態の類似から、一時の思いつきめいた比較論をして見ても、この兩書の文獻學的研究が果し

てその比較論を支える結果を生むか否かは保證の限りではないのである。枕草子の原本的性格、徒然草の原本的性格には今日の常識を訂正すべき大きな祕密がまだまだ潜んでいるようである。

従つて文獻學の對象規定をこのように定める事は、一見、その領域を甚だ狭いものにするようにも見えるけれども、實はその内實を純粹、かつ豊富にする事にほかならないのである。

四 文獻學の方法

ベックが文獻學の形式理論として「批判」^{クリティク}と「解釋」^{ヘルメネウチク}とを古代學の素材的諸學に先行せしめる態度は、「日本文獻學」の成立に當つてもそのまま受けつがれた。原本的性格は常に破損せられたものとしてわれわれの前に示される。「批判」とはこの研究對象が資料として純粹なるものであるか否か、更にはその眞偽についての科學的考察である。「解釋」とは原作者の主體が認識したもの——意味の根源性への追體験、再認識である。この二つの活動は相互に前提となり合いながら進行するものであつて、あたかも呼吸と生命との關係のように科學的規律のもとに、原本性という無限の彼方に向つてとどまる事なく交錯展開して行く。

この批判的方法論の確立によつてまず文獻學がかちとつた領域は「本文史」^{テクニク・ゲシヒテ}である。現に保存せられている寫本を、系統的關係によつて歴史的に整頓し、この「本文系譜」の設定

は、無秩序に羅列せられた寫本素材を單純化して示す事が出来る。恣意の全く介入する餘地のない「異文」一覽表（校本・校異）を基礎とする事によって、寫本の客觀的な價值評價が可能となるのである。カール・ラハマン Karl Lachmann によって確立されたこの「改訂」Emendatio と「吟味」Reensio によって、「低部批判」nieder Kritik から文獻の構造を解明しその成立を明かにする「高部批判」höhere Kritik への道が開かれるのである。

これら低部批判の結果として著者自筆本に近いもの、或は今日に於てはそれ以上に進む事が不可能に近い校本の作成がなされるに至ったものも二三あるわけであるが、一つにはかかる結果が方法的自覺に立ったが故にのみなし得るものである點に、近世國學が往々にして陥る所であつた恣意的な改訂による原本的なものの改悪とは趣を異にする科學性が保證されるわけである。こう概観する事によって、近世の國學がその性格において近似しているために、國學即文獻學と考える事が誤りである事もほほ明かになるであらう。

五 文獻學的國文學とその限界

既に明かであるように文獻學は國學と同じものでもなく、又、國文學と等しいものでもない。唯、文獻學者といえども、作品の價值規定を全く行わないというのではなく、作品の歴史的觀察から全く手を引くといふものでもない。それは文獻學的國文學の限界を越えて、他の

領域に身を置いてする發言である。これは避け難い事であると共に、それを強く意識せねばならない。

國文學の學問機構は文獻學的・文藝學的・歴史學的・民俗學的の四部門が、人間の内臟諸器官と同じ有機的なつながりを以て組織していると私は考へる。文獻學的國文學の對象と方法とは、先に述べた通りであるが、それが文獻學的國文學である限り、その對象とする所は文藝的作品でなければならぬ。古文書・記録の類は對象としてではなく、材料として重視されるに過ぎない。文獻學一般との相異はこの點を除いて考へられない。

従つてふたたび繰返すなら、日本の文藝的作品の原本的性格、——原作者によつて經驗された作品形象の終局的・根源的な一點として、作者の精神をも含めた自筆本——を追求する事が目的とされる。

細かな實例を一つあげて見よう。枕草子の雪の山の段は、長徳四年十二月十日の大雪に、職の御曹司の庭に雪の山を作り、中宮が「この雪の山は何時頃まで消えずにゐるであらうか」とたずねられた時、他の女房たちが十日餘りと答へたのに、清女一人、來年正月十五日までと斷言した事に始まる。年を越え、正月十三日の夜の大雨にも消えず残っていた雪が、十五日には一夜にして消え去っていた。失望落膽して清女がその由を啓すると、中宮は、十四日夜、人をやつて取り捨てさせたのだと笑われた。他の女房たちから嫉妬されてもとの配慮で

ある。この中の清女が啓する言葉に

身はなげつとてふたのかぎりもてきたりけむほうしのやうにすなはちもてきたりしがあ

さましかりしこと(三卷本による)

とある。春曙抄本では「皆きえつとてふたのかぎりひききさきげてもてきたりつる。ほうしのやうにて」云云とある。春曙抄に従えば、雪をとりに行った使が「雪は皆消えてしまつた」といって雪を入れるための箱のふただけぶら下げて歸つて來た。そのふたを帽子のようにかぶつてすぐ歸つて來たのが心外だつたといつた意味になる。然し實は傳能因所持本第一類(三條西家本)には「ほうし」に法師の字をあてているから、この書寫された室町時代には法師と書いてあつた事が知られるし、「身はなげつ」とある三卷本は春曙抄本のようにには解釋出來ない。實は釋迦が雪山で修行中、「諸行無常、是生滅法」の偈の後半をきくために餓えてゐる羅刹に身を投げて教を乞うた故事をふまえて、「身は投げてしまひました」と洒落をとばした或る法師の事を、ここに巧みに結びつけて、定子に啓上したのである。即ち春曙抄本による限り、この部分の作者の主題的意圖は全く無視されてしまつてゐる事になる。「みは」、「みな」の一字の相違と、「法師」「帽子」の字の宛て方で、原本的なものがいかに變貌するかを示す例とするに足りるのであらう。

枕草子の現存諸本が、(一)三卷本第一類・第二類。(二)傳能因所持本第一類・第二類。(三)堺本

第一類・第二類。(四)前田家本の四系統に分類されたのはきわめて最近の事であり、若干の異説は出たとしても大綱において變る事はあるまい。從來使われていた春曙抄本は傳能因所持本第二類の系統の古活字本に三卷本末流の本文が混入した混態本文であって、これによって作者清少納言の認識したものは何かをうかがう事は不可能である。文藝學的な、或は歴史學的な發言は、若しそれが科學的客觀性を保とうとするならば、この明かにされた「個」の意味とかたちとに絶對に従わざるを得ない。然し逆に文獻學に於ても、この作品が、古代貴族社會のもとにおける受領の家に生れた一女性の作である事を認めなければならぬし、作者の閱歷・教養・思想などを始め、時代の言語・風俗・藝術その他の古代學的萬般の知識の總和を以てしない限り、原本の性格の追求は不可能に近い。枕草子の原本は類聚的な部分、日記的な部分、隨想的な部分の三部から成り、第一部は長徳二年秋に、第二部は長保二年、定子崩後まもなく、第三部は長和六年、兄致信の歿後まもなく成立し、それらが加筆修正されてまとめられたと考へ、定子皇后の遺された一品脩子内親王に贈られたものではないかと考へているが、この私の高部批判も萬般に渉る知識の綜和として生まれたものにほかならない。

この稿の筆者は徒然草を批判するために百數十種の寫本を調査したが、これは數量を誇るためのものではなく、その中から見出される慶長以前の古寫本のもたらす「意味」を求めるための操作であって、正徹本など從來知られていた徒然草本文について、「徒然草に異本な

し」と考えられていた誤解を解き、更にその成立の事情についての手がかりを得て、兼好法師において認識されたもののかたちを明かにしようとな願したからにほかならない。

一體、原作者への復歸ということは口で言うほど容易な事ではない。文獻一般に共通する法則的なものを見出すという根本信條に立って、その原本性を追求することは、時あって文藝學者のポエティカルな一面に走りたくなる衝動を克服せねばならず、又、時あって、古代國家崩壞期に於ける世代の鬭争という、作品生産の背後にある歴史の意味を追求する、學界の新しい魅惑的な課題への關心をさえ押えなければならぬこともある。毅然として自己の道に専心する以外に方法が残されていないほど、それは峻しく高く聳えた道程である。國文學の機能的體系内において、各分野が共存しつつ、協調して行くためには、同時に四つの部門が論争に満ちた自己確立をして行かなければならない。他の諸方法に比して一見基礎的な部門を擔當しているように見える所から、他の活動に對して優先的發言權を持っているかの如き恫喝の言辭を弄する存在では決してない。他の諸方法と協力し、それらの相互的發展によつて國文學に寄與する時に、文獻學的方法の意味がある。

日本文學研究法
—日本文學講座第一卷—

編者

日本文學協會

1955年2月25日第一刷

檢印廢止

定價 150 圓

發行所

財團法人 東京大學出版會

代表 有澤廣巳

東京都文京區本富士町 1

振替 東京 59964

電話 (92) 0880

印刷所 精興社

製本所 矢嶋製本

日本文學講座 全七卷完結

編集擔當

- | | | |
|-----|----------|------|
| I | 日本文學研究法 | 廣末保 |
| II | 日本の詩歌 | 西郷信綱 |
| III | 日本の民衆文藝 | 西郷信綱 |
| IV | 日本の小説 I | 稻垣達郎 |
| V | 日本の小説 II | 稻垣達郎 |
| VI | 日本の劇文學 | 廣末保 |
| XII | 文學教育 | 古田擴 |